

私の戦争被災体験 鳥飼道明

青い空を見上げると今日も米粒より小さい物体がキラキラ光って頭の上を通過する。B29。まだ空襲警報は発令されない。千葉には軍隊の施設が非常に多くあった。何れは爆撃されるだろうと思っていたので、毎晩着替えもしないで寝ていた。昭和20年7月7日未明、突然大きな爆発音、軍事施設に大量の爆弾が投下された。次は、市街地に照明弾、まるでナイターのグランドのように辺りを明るく照らし、焼夷弾が雨霰のように、松林に強風が吹き付けるような音を立てて落下、瞬く間に火の海、私達3人は誘導され、寒川から蘇我方面の海辺に避難、埋め立てに使用する鉄管に潜ろうとしたが、拒否されたのでさらに南に移動し浜辺に腰を下ろしたが、真夏なので白い服を着た人が大勢集まり危険を感じて更に南に移動した。

姉が「キタ」と言ったので私は防御の態勢をとろうと腰を上げた瞬間、姉が「やられたと」叫んだ。姉は背中に二発、布団を被っていたので打撲傷ですんだ。私は臀部に大きな衝撃を感じたので手で押さえると指が入り出血していた。肩を借りて鉄管の方に戻る途中、最初に腰を下ろした場所は悲惨な状況だった。多くの人のがのた打ち回り、泣き叫びながら助けを求めている。私達は鉄管の中に身を横たえた。強い風と共に雨が降ってきた。それから暫らく記憶が無い。

気がつく天井の高い大きな格納庫らしい中に横たわっていた。多くの死体が整然と並べられていた。診察に来た医師が長い銀色の棒を傷口に差し込み深さ13センチ、右股関節盲瘻重瘦と診断された、収容先を探していたが殆どの病院が焼失、どこも負傷者が溢れて見つからないようだった。又意識がなくなったようだ。気がつく県庁の北側にある教育会館の玄関前だった。そこには火傷をした人々が大勢群がっていた。この近辺の大きな建物、裁判所なども消失していた。県庁の前の都川には、火に追われて飛び込んだのだろう溺死体が沢山浮いていたようだ。

教育会館の奥の部屋の藁のベットで横になると直ぐ眠ったようだ。発熱と全身の痙攣で目が覚めた。夏なのに寒い。冬の布団を取り寄せ掛けてもらっても寒い、身体が震える。やがて傷口を治療しガーゼを詰めたが震えと言うか痙攣と言うか止まらない。薬も注射もない。現在のような点滴も無い。傷口にガーゼを詰めるだけ、40度を越す高熱が続いた。高熱で脳障害を起こす危険もあった。2度の破片摘出手術も失敗。詰めたガーゼが膿でビシャビシャ、壊疽かもしれないと言われた。更に尾骶骨には床擦れ、衰弱が激しく、最早これまでと告げられていたそうですが、ガーゼ交換の際に、ガーゼと共に爆弾の破片が出てきた。それによって高熱も治まり、徐々に回復した。

熱が下がるのを待っていたかのように、手術室に運ばれ、腐った股関節の除去手術が始まった。麻酔らしい注射をされ、3~4人の人に押さえつけられた。あまりの痛みで、「やめてくれ、誰か助けてくれ、止めてくれ」と悲鳴を上げ泣き叫んだ。生体解剖のようだ。局所麻酔では骨には全く効き目が無い。股関節の丸い骨の一部を切除してこれで終わりかと思ったら、又数人で押さえつけ、二人掛りで足を引っ張り、腋の下から足首まで板を当

て包帯でぐるぐる巻きにされた。医師が「終わったよ。でもこれからは寝たままの生活になるが頑張れよ」と云われた。(右股関節に被弾盲貫重創骨頭除去、不全硬直と診断)寝たままの生活と言われても、痛みで疲れ果てた状態の中では、その意味が理解出来なかった。退院前に膝の関節は曲がるようにしてやろうと、骨が折れるのではないかと思われる程曲げ伸ばしをした結果膝関節は屈伸できるようになった。これが最初で最後のリハビリ。

家に帰ってからは、股関節が曲がらないので自分一人では寝起き出来なかった。このとき初めてあの医師の言葉の意味が理解できた。まだ13歳、寝たままの人生をあと50年、人体の解剖図を見て毎日考えた。使えない足なら無いほうが邪魔にならない。片足無くなってもかまわない。我流で歯を食いしばって、鍛えた結果、7ヵ月後の昭和21年4月には杖も使用しないで、津田沼の学校に復学することが出来た。

退院後は現在のようなリハビリはなかった。(我流のリハについては長くなるので省略)卒業後は就職したくても、産業もないし復員した若い兵隊さんが溢れていたのも身体障害者などは、就職は困難だった。姉の友人に映写技師見習いの仕事を紹介された。暫らくしてから、このフィルムを返して来いと云われた、これで首かと思った。35ミリフィルムを10巻、私の足では無理な重量、担いでもみないで、しり込みする様では、何もやっても失敗するだろうと意を決してやってみた。何とかできたが近くの寺院で計理士さんが簿記を教える寺子屋を開いた。就職困難な時、自動車会社の経理として紹介してくれた。自動車会社なので毎日朝夕免許が無くても車庫から出し入れをしたため18歳で免許を取得出来た。当時は自動車は少なく教習所もない時代だったが、就職先が良かった。この頃の自動車の性能はブレーキ一つをみても、バキュームも油圧で加圧する装置も無いので力任せに足を踏ん張らないと制御出来ない程性能が悪かった。受験のときに障害者にとって特に、ブレーキを踏むほうの足の障害、非常に力が必要なことと、敏速な動きを要求されるので不安に思ったが面接の結果支障なしとの判断で合格となった。大きな転機となった。

振り返ってみると、もうこれまでと思ったときに、爆弾の破片がガーゼにひっかかって自然に出てきた。生涯寝たきりの生活だと言われたが、駄目でもともと人体の解剖図を参考にしながら、がむしゃらに我流で挑戦したこと、バイトで尻込みしないで足を使ったことにより大きな力がついた、畑違いの簿記を勉強したきっかけで、就職先に恵まれたことが、絶望から希望へと大きく変わった要因だと思った。

翌年4月には復学できた。昼食の時間になると、教室に残る生徒は7・8人。食糧不足で弁当を持ってこられないのが原因。何を食べているのか他人に分からないように隠して食べる。離島に派遣された兵士も、集団疎開をした児童の何人かが餓死したと聞きました。これを聞いて非常にショックをうけた。私はこれまで何も語らなかったがこの戦争の悲惨さ、目玉が飛び出そうな大きな目、身体も手足もやせ細り関節だけが大きく目立つ、そしてお腹がどういいうけか膨れて、やがて死んで逝く。極端な食糧難、幼い子供が、これほど残酷なことはありません。昭和22年ごろからは米価の高騰、土肉餅といってサツマイモを摺って澱粉を採った粕。糞のような匂い。食用ではないので小さな砂利が歯に当たる。何でも食べて飢えを凌いだノビル、アカザ、ヨモギ、ワラビ、スギナ、等知識があれば野

原に沢山あった。米国から小麦、トウモロコシ、大豆、砂糖などの救援物資が届いたが、燃料が無くて、食べることが出来ない物もあった。山林で集めた松葉では残念だが煮る事が出来ない。

昭和の米価暦（米 10 キロ当りの生産者価額）

昭和 16 年	16 円 50 銭（太平洋戦争）	23 年	1487 円（帝銀事件）
17 年	16 円 90 銭	24 年	1735 円（湯川氏ノーベル賞）
18 年	18 円 42 銭	25 年	2060 円（朝鮮戦争）
19 年	18 円 80 銭	26 年	2812 円（講話条約）
20 年	60 円（終戦）	27 年	3000 円（農地法交付）
21 年	220 円（農地改革）	28 年	3280 円（NHKテレビ放送）

昭和 21 年になるとアメリカの指導による財閥の解体、と大きな農地を持つ地主に対し厳しい農地改革、赤紙一枚で働き手の男性を失い、やむをえず小作に出した田畑は没収同様の価額で、水田は 760 円、畑は 450 円という安値で強引に買い取り、安値で小作人に譲渡した。売り渡しを強要された農家は 1 反部 1 表の米も手に入らなくなったので、益々困窮を極めた。対象は農地のみで、宅地は対象外だった。非常に不公平な政策だったと思う。

更に政府はこの戦争で多額の金を使い、その穴埋めに 1946 年国民の預金を封鎖し預金の引き出しを制限した。所帯主は月額 300 円（換算すると約 12 万円）所帯主以外は 100 円（4 万円）しか引き出すことができないようにした。又筆筒預金には、新円を発行し旧紙幣は新円発行のため通用できなくした。これも一人当りの金額に制限を設けたため、膨大な金額が灰になった。

終戦から 75 年経過しましたが、未だに治療費も自己負担、政府からの治療費の保証が無いのは如何な事か。最近では負傷したと言う人は殆ど見当たらなくなりました。昭和 30 年ごろだったと思いますが、最早戦後は終わったといった政治家がいましたが、あれから 40 数年経ちましたがまだ終わりではない、私たちが生きている限り戦後は終ってはいない。でも悲しいかな、もう少しで終わりが見えてきた。それはともかく、最近ではきな臭い匂いが漂ってます。これまでは 50 年経つと戦争が再び起こると云われています。北方 4 島は戦争で取り戻せばと云うとんでもない政治家、どんな議員でも多い方がいいと云う政党。あの痛みを忘れている人、あの痛みあの苦しみを経験したことの無い人が多くなりました。危険な時代が迫って来たような感覚。あの残酷な苦しみを伝えてゆくことが我々経験者の役目だと思いました。2 度とあのような事にならないように。いつまでも平和でありますように。

令和 2 年 5 月 20 日

負傷 1945 年 7 月 7 日未明 傷病名 戦災により右股関節骨頭に被弾除去

千葉県立千葉工業学校機械科 1 年生 当時 13 歳